

「十字架を担がせられたシモン」

マルコ15:21-32 (マタイ27:32-42, ルカ23:26-43)

「兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた」(21)

1、キレネ人シモンが強いて十字架を担がせられたという話は、それぞれの福音書でニュアンスが異なる。十字架刑はギリシャ・ローマの世界では最も野蛮で残酷な処刑方法であった。死刑の手順にはある種の基準があり、処刑に先立つ鞭打ち、刑場まで柱を自分で運び、両手を広げて釘付けにされ、高くあげられるものであった。刑吏の気紛れのサディズムさえ発揮される事があったらしい。この刑は政治的・軍事的処罰であり、ローマでは下層民、奴隷、暴力犯、反乱をおこしたユダヤ州の不穏分子に対する処罰であった。「すべての死刑の方法で最も悲惨であった」(ヨセフス「戦記」)と言われた。「無理に」(アッカレウオー)は公用を強いるの意味である。昔のベルシャ国王の騎馬伝令使(アッカロス)からの派生語。彼らは途上、馬でも船でも強いて使用する職権をもっていた。キレネは北アフリカのキカイナの首府、ギリシャ植民地中最大の都市の一つであった。紀元前4世紀からユダヤ人が住み始めたという(キレネへの言及は「使徒」2:10, 6:9, 13:1にある)。「田舎(原語は郊外、畑とも訳せる)からでてきた」とは、祭りの巡礼にきたか、あるいは偶然かも知れない。「アレクサンドロとルフォス(ロマ16:13)の父」とあるが、当時の読者には意味があったのであろう。ルカは十字架を「背負わせた(エピティテミー、上におく)」を用いるが、マルコは「自分の十字架を背負って・担いで、(アイロー)」(8:34)と同じ言葉を用い、イエスに従うことの神学的意味を一貫させている。

2、シモンの負った十字架は、表面的には、刑の執行を早く済ませたい実務型の刑吏と目が合った偶然に過ぎない。しかし、マルコは言外に、①シモンのように弟子たちは直接にイエスの十字架を担がなかったこと、「弟子の無理解というマルコの主張」をほのめかす。②自分の意志とは別な「神の計画」(箴言19:21)という意味をも含ませている。「無理に(マタイは踏襲)」はルカには無い。ルカは主語を「人々」とする物語りにしているので、シモンは受難物語の一つの風景でしかない。しかし、マルコはイエスの処刑死という出来事に、自分のスケジュール表にない予定外の「十字架を担ぐ」ことが起こることの証しとして、シモンを登場させている。

3、この物語りにまつわるエピソード。①鶴見俊輔「自分の主題の発見には、道草が一番だ」。シモンも好奇心から人だかりを覗きイエスの十字架を負う羽目になった。彼の人生では道草だったかも知れない。しかし、彼の名を今私たちは覚えている。②神戸教会伝道師だったTさん。クリスマスの重い樅の木を、六甲山系の山から切り出し市内の教会まで担ぎ降りるといふ彼の人生にとっては偶然の出来事に、キレネのシモンを心に刻んだという。後々この事は彼の牧会生活に深い意味を持ったと言う。